第6章　吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査

1　調査の経過

当調査は吉田構内地区割N－12・14の地点で、大学会館新営に付随する電気・ガス管等の共同溝設置工事に伴うものである。まず工事自体は大学会館の北と南の二カ所（Fig.17参照）で、A区では、電気と給水、ガス、消火配管の二つの共同溝を布設するもので、両者は平行して約70mにおよぶ。幅は両者合わせると4mで、掘削深度はいずれも2mを要する。ただし、大学会館寄り約2mは昭和58年度の本来工事に伴う事前調査の余掘部分の範囲で、また南側の現道路部分は周辺の既往調査により地山が大きく削平され、遺構が遺存しないことが明らかなことから調査の対象から除外した。B区は電気の配管溝布設で、長さ30.3m、幅60cm、深さ一部1.5mを要するものであったが、この地点は本体工事に伴う調査の結果から、今回の最大掘削深度内では遺構面まで達しないことが明確なことから事前の調査は実施せず、工事の掘削の際に立会調査を行なった。

なお、今回の調査対象となった地点は、大学会館新営に伴う試掘調査（昭和57年度）、第二学生食堂新営に伴う発掘調査（昭和46年度）などのデータより、仮に後世の削平が少なければ古代から中世に至る遺構が濃密に検出される蓋然性が高いことから、運営委員会および関係部局と協議の結果、事前の調査を行なうこととした。

以上のことにより、当調査はA区の北側約40m、幅4m、面積160㎡を対象とし、昭和59年7月5日から26日まで、人文学部考古学研究室の協力のもと実施した。（森　田）

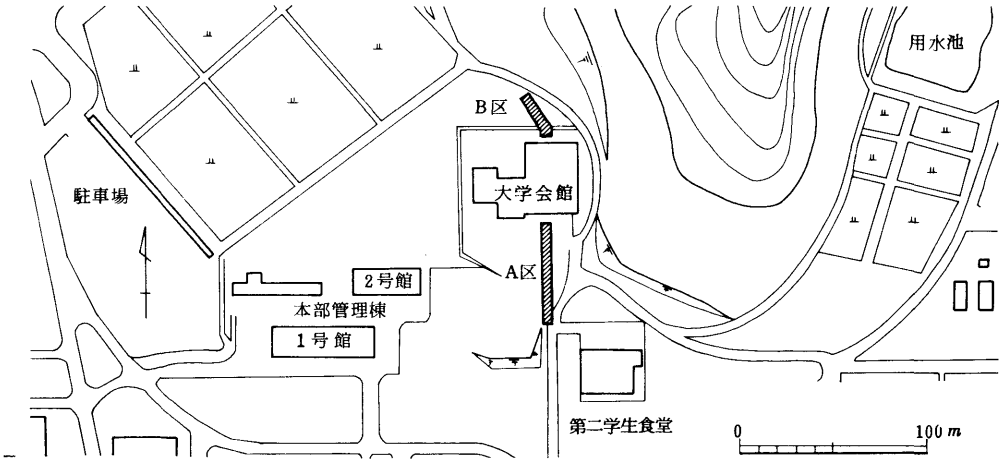


Fig. 17　調査区位置図

2　位置と環境

吉田遺跡は、山口県山口市大字吉田に所在する山口大学構内とその周辺に拡がる縄文時代から近世まで長期にわたる遺跡の総称である。本遺跡は、山口盆地の中央部を南西に貫流する椹野川の左岸に形成された沖積低地及び低い洪積台地上に展開する。遺跡の北には姫山とニンジョウガ岳が小起伏山地を形づくり、東には今山が、南には高倉山がひかえる。

以下、吉田遺跡をとりまく地域[1]の歴史的変遷をみていく。

さて、この地域にはいつ頃から人々が生活を営み始めたのであろうか。現時点では旧石器時代に遡る遺構・遺物は確認されていないが、大学構内から縄文時代早、前期のものとみられる石鏃[2]が発見されておりこの地域では最も古い遺物に相当する。遺構としては同遺跡において縄文時代後～晩期の土壙[3]が検出されている。

弥生時代から古墳時代に至ると、遺跡数は急増する。まず集落遺跡としては吉田遺跡が知られている。遺跡の大部分を占める大学構内からは竪穴住居跡、溝など多数の遺構が検出されており、山口県下でも有数の大規模な集落が形成されていたと推定される[4]。

一方、埋葬遺跡としては乗ノ尾遺跡[5]、日吉古墳群[6]、吉田大裕古墳[7]などがある。乗ノ尾遺跡は大学の南に位置する丘陵上に立地する。弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての箱式石棺が5基検出されている。日吉古墳群は大学北側に近接する山腹にあり7基の横穴墓が確認されている。出土品としては耳環、鉄剣、土師器の坏、須恵器の坏、高坏、平瓶、提瓶、短頸壷があり、この他に人骨の一部が検出された。また日吉古墳群のある丘陵の南へ続く通称もり山の南斜面にも横穴墓[8]があり、大正15年頃発掘を行なった際須恵器の平皿の破片が出土している。なお、もり山の頂上にも円墳があると伝えられる。さらに大学構内の南にあたる農学部家畜病院付近に箱式石棺が埋存するという報告[9]があり、勾玉や円筒埴輪などが採集されている。この石棺はそのまま埋め戻されており、今後詳しい調査が必要である。吉田大裕古墳は大学東側の洪積台地の斜面上に造営された7世紀後半頃の横穴式石室を有する古墳で、須恵器片が出土している。この他、吉田大裕古墳の西に位置する平清水八幡宮の参道脇にも古墳[10]があり主体部の石材らしきものが散在している。昭和初年に須恵器の提瓶と平皿の破片が発見されている。この古墳には「村の者が貧窮し困った時ここを掘ったら一度は助かる」という伝説と「朝日さし夕陽かがやくこの下に黄金千杯漆千杯」という歌謡が伝えられており興味深い。大学の南にあたる大塚付近[11]にも古墳らしきものが現存する。墳丘上には主体部に使用されたとみられる石材が残っており、過去において須恵器が採集されている。さらに神郷や東馬木付近[12]でも現存はしていないが組合式石

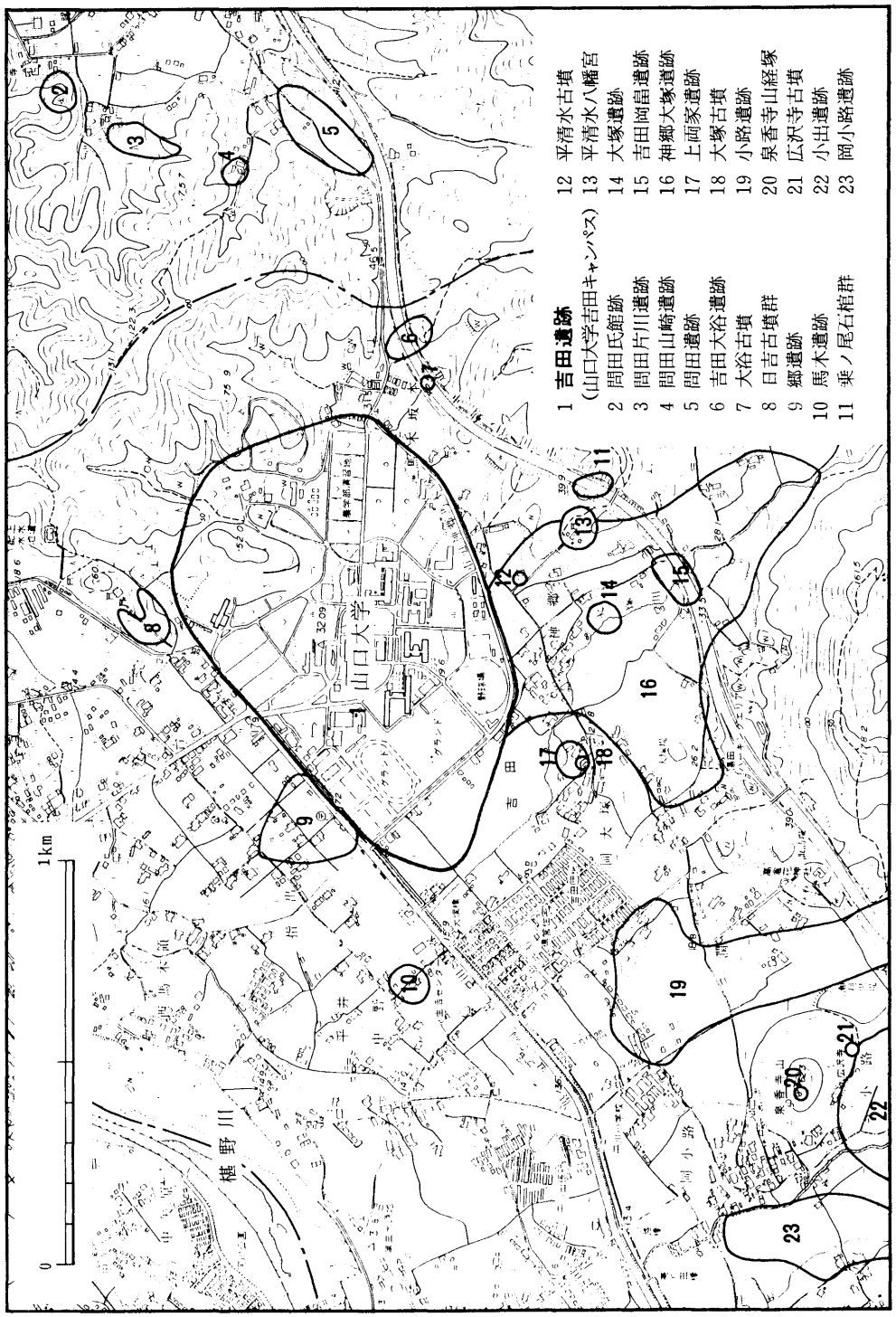


Fig. 18 吉田地区周辺地形図および遺跡分布図

棺とそれに伴う人骨及び鉄器が検出されており古墳があったと推定される。馬木にも古墳が存在したと伝えられ、滑石製の馬や土器等[13]が出土している。

以上のことを概観すると、埋葬遺跡はいずれもやや小高い場所に吉田遺跡を取りまくように点在しておりこれらは吉田の地に居住していた人々の奥津城と考えられる。

奈良、平安時代の遺跡はあまり確認されていないが、大学構内の北部からこの時代の遺物が多数出土し、その中には石銙帯、木簡、墨書土器、硯[14]など上層階級者や律令制における地方行政組織の存在を示唆するような遺物も含まれている。また、付近には「八ノ坪」という坪名が残っており条里制が施行されていたことが推測されている。当時全国各地に郡郷里制がひかれているが、吉田を包括する平川地域は吉敷郡に属す。吉敷郡には10郷[15]があり、そのうち平川地域は『大日本地名辞書』では仲河郷に、『防長地名淵鑑』では浮囚郷に含まれていたとされており、確定された見解はない。

中世の遺跡としては、集落遺跡として知られる吉田岡畠遺跡[16]や吉田大浴遺跡、吉田遺跡等がある。特に大学構内の一角では、周辺の遺跡に比べ、輸入陶磁器類が多量に出土[17]しており富裕層の存在が推測されている。また当時の寺院としては、平清水八幡宮[18]が名高い。創建は809年（大同4年）と伝えられるが定かではない。1201年（建仁元年）の『安部光包惣貫首職補任状』に平清水八幡宮の朱印が押されており鎌倉時代には存在していたとみられる。現在の本殿は室町時代前期頃の建立とされ、山口県下でも最古の部類に入る。

鎌倉幕府は、土地の管理や治安の維持等を目的として全国に地頭を配置している。当時、吉田周辺地域は恒富保[19]に含まれており、この恒富保及び近隣の仁保庄（にはのしょう）の地頭職として関東から補任されたのが平子重経[20]である。父重経から恒富保の地頭職を受け継いだ重継は、恒富氏と称した。13世紀に至ると、恒富氏は本家の恒富氏と分家の吉田氏とに分かれ、恒富、吉田の地で栄えたという。しかし、現在のところ両氏の存在を示す館跡等は明らかにされておらず、吉田遺跡をはじめとして調査が進められている。

近世以降、吉田周辺地域は一農村化の傾向をたどり近年まで続いたが、昭和41年の山口大学統合移転を契機に住宅団地などの建設があいつぎ、その様相は変貌しつつある。今後、開発の進行に伴い遺跡の発見も相次ぐと予想される。なお、吉田遺跡は、その大部分が約72万㎡もの広大な敷地を有する山口大学構内に埋存するため、広範囲にわたる学術調査も可能であり今後の調査が大いに期待される。

（福　島）

位 置 と 環 境

〔注〕

1) 山口盆地全体の位置と環境については、山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅰ、Ⅲ（1976、1985年）を参照されたい。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』（1985年）。

3) 山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』（1976年）。

4) 注3）に同じ。

5) 山口県教育委員会『内川古墳・乗ノ尾遺跡』（1973年）。

6) (a) 山口市平川公民館『平川郷土の歩み』（1961年）。

(b) 石川卓美『平川文化散歩』（山口市平川公民館、創立25周年記念出版、1972年）。

遺物は現在、県立博物館に所蔵されている。

(c) 山口県教育財団『山口県内出土考古資料所蔵目録』（1979年）。

7) 山口県教育委員会『吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡』（1973年）。

8) 注6）(b)および小川五郎「考古雑記」（『防長文化史雑考』小川五郎先生遺文選集、1970年）。

9) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）、および本年報付篇2を参照されたい。

10) 注6）(a)、(b)および内田伸『山口ところどころ』（1973年）。

11) 注6）(b)に同じ。

12) 注6）(a)に同じ。

13) 弘津史文『防長原始時代資料』（山高郷土研究会、1925年）。

14) 注2）に同じ。

15) 『倭名類聚抄』によると吉敷郡内には、八田、宇努、仲河、益必、広伴、神前、多宝、八千、賀宝、浮囚の10郷があったとされている。

16) 注7）に同じ。

17) 注2）に同じ。

18) (a) 山口市史編纂委員会『山口市史－各説篇－』（1971年）。

(b) 山口県神社庁『山口県神社誌』（1972年）。

(c) 山口市教育委員会『山口の文化財』（1983年）。

19) 平清水八幡宮の1308年（徳治3年）の神主職譲状及び廃寺高蔵寺の1414年（応永21年）の鐘銘による。

20) 1197年（建久8年）の『三浦文書』に記述がみえる。

3 層 位

トレンチ内における土層状況は西壁をみると、$x=525.5$ を境に北側と南側で大きく異なる。南側は表土から地山面まで約20㎝程度と浅く、その間は置土で旧耕作土や遺物包含層は遺存しないものの、地山面に弥生～古墳時代を主とした遺構が遺存する。北側は近代以降において大きく地山が削平されている部分で、古代の遺構は既に消失している。地山までの深さはＳＤ４の北と南で約60㎝の高低差がある。ＳＤ４より北では最も厚いところでは約140㎝の置土があり、地表は北へ向かって下る。H＝24.00ｍ下に厚さ12㎝前後の暗灰色土の旧耕作土が存在し、$x=535.5$ 以北では、旧耕作土と地山面の間に黄灰褐色土の床土があり、さらに複数の堆積層が続く。地山面はゆるやかに北へ傾斜する。$x=535.5$ 以南ＳＤ４までの間は、旧耕作土直下に弥生時代の遺物包含層であった暗茶褐色粘質土が後世の人為的な置土としてひろがり、その下は平坦な地山面である。またＳＤ４より南の層序は、50～60㎝の置土下標高24.50ｍ前後に旧耕作土があり、その直下は床土はなく平坦に削平された地山面である。

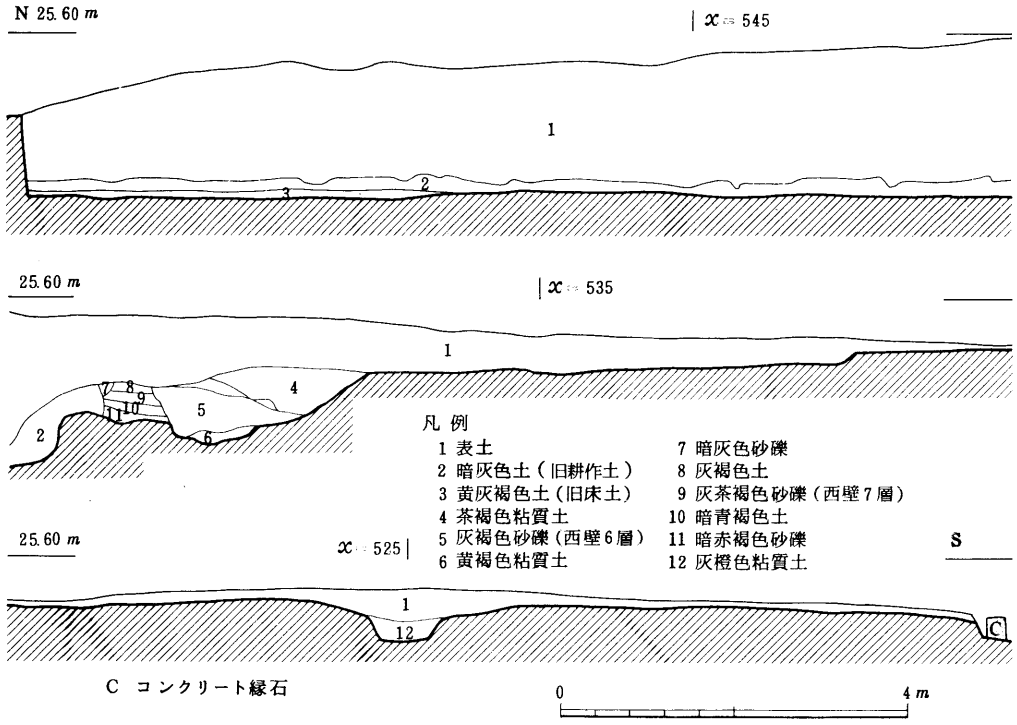


Fig. 19 東壁土層断面図

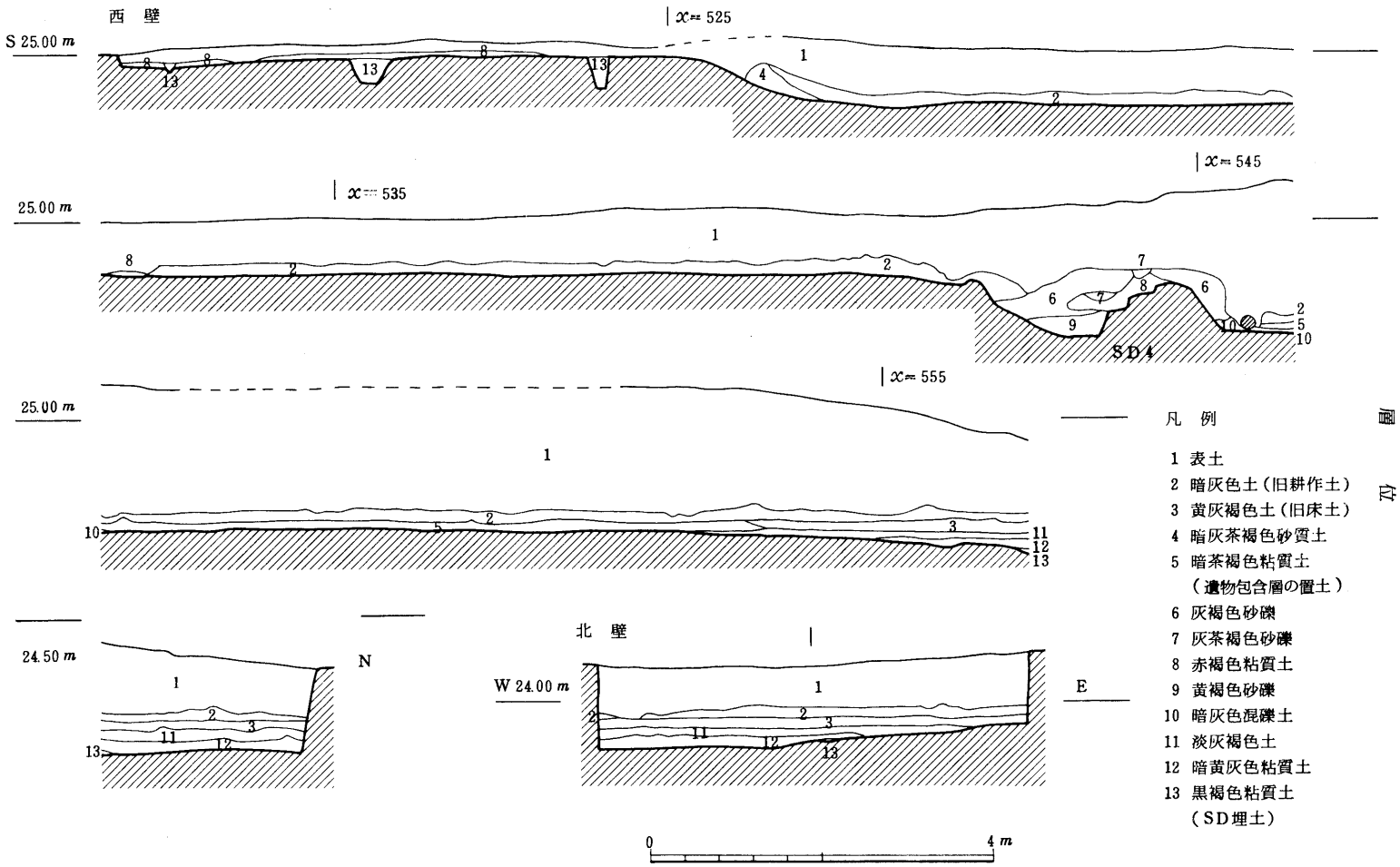


Fig. 20 西・北壁土層断面図

4　遺　構

ＳＤ１～３

調査範囲の北端で検出した北東－南西方向に併走する３本の溝で、いずれも幅約30㎝前後、深さ10㎝未満の小規模のものである。時期は伴出土器がないため決めかねるが、一応近世以降の耕作地開墾に伴う排水施設の一部である蓋然性が高いと考える。

ＳＤ４

幅約2.2ｍ、深さ約60㎝の溝で、東北東－西南西方向に走向する。溝内は段を呈し、底面の数箇所に細い木杭が打ち込まれていることを確認する。埋土の土質や堆積状況を勘案すると、比較的短期間に埋没した溝と考える。時期は溝内より多量の近代以降の土器類等が入っており、大学設置直前まで存在した可能性がある。なお、出土遺物の中には土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦など中世、古代のものが若干混入する。

ＳＤ５

幅約１ｍ、深さ約30㎝を測る。南東から北西へ走向するが西側は後世の削平によりカットされる。埋土は粘質土、粘土である。時期は定かでないが、埋土の色調等から、古墳時代までは遡らないと推察する。

ＳＫ１

ＳＤ４の北側に隣接する土壙で、長さ約1.8ｍ、幅１ｍ、深さ約40㎝を測る。内部の４箇所には木杭が打たれている。時期は不詳ながら、埋土の状況等によりＳＤ４と大きな時期差はないと思われる。

ＳＫ２

トレンチ内のほぼ中央に位置する幅約80㎝、深さ約14㎝の土壙で、一部後世のカットをうける。時期は出土遺物皆無のため不明。

ＳＫ３

長さ91㎝、幅77㎝、深さ20㎝を測り、平面形状は長円形を呈する。内部には土器、小型の石が集積していた。時期は出土土器から弥生時代前期とみられる。

Ｐｉｔ群

調査区南地域の後世比較的削平度が少なかった部分に遺存する柱穴群で、約30前後検出した。大きさは径約20㎝前後が最も多く、深さでは40㎝以上のものもある。時期は出土遺物および埋土の色調等より大半は弥生時代から古墳時代の範疇に属し、一部中世のものが含まれると考える。

（森　田）

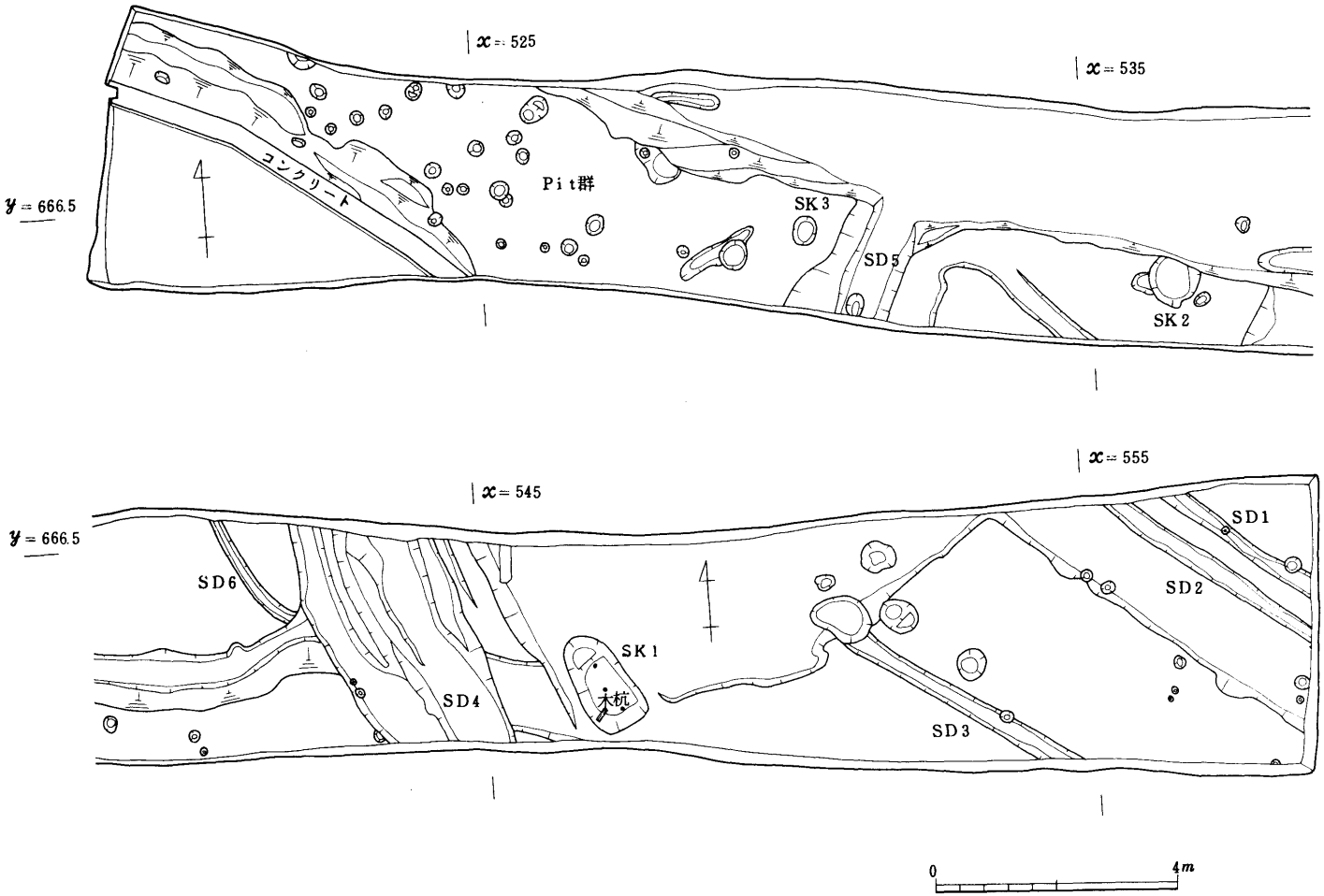

x = 525
x = 535
y = 666.5
コンクリート
Pit群
SK3
SD5
SK2
x = 555
x = 545
y = 666.5
SD1
SD2
SD6
SK1
木杭
SD4
SD3
0
4m

Fig. 21 遺構配置図

5 遺 物

ＳＫ１、ＳＤ４、遺物包含層等より整理用コンテナ約二箱分の遺物が出土した。その大半はＳＤ４からの出土である。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器などの土器類と瓦がほとんどを占め完形品は皆無である。以下では図示可能な比較的残りのよいものについて述べる。

ＳＫ１（Fig. 22，1～4）

1～4は弥生土器。1・2・4は壷の底部で、すべてやや上げ底を呈す。1・2は円盤貼り付けを行なう。1の内面にわずかに篦ミガキが認められる以外はいずれも器表面がかなり磨滅しており調整不明。3は甕の底部。上げ底を呈し胴部は斜外方へ直線的に立ち上がる。

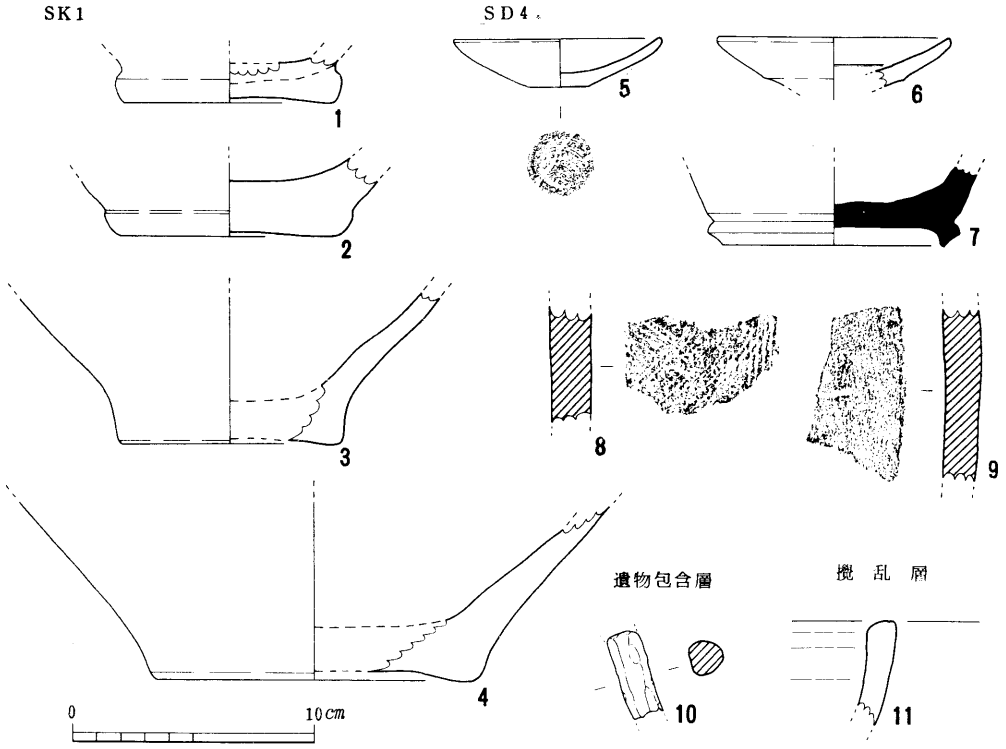


Fig. 22 出土遺物実測図

遺　　物

ＳＤ４（Ｆｉｇ．22，５～９）

５は土師器の小皿。体部は内彎しながらゆるやかに立ち上がる。糸切り底で内外面とも横ナデ調整。６は輸入陶磁器の小皿。色調は灰白色の素地に半透明な灰白色の釉を施す。体部の内面中位に一条の沈線を有する。７は須恵器壷の底部。「八」の字形に張る高台を貼付し、端部は斜上方へ肥厚する。体部下位は外上方へ直線的に立ち上がる。外底はナデ、他は回転横ナデ調整。８・９は平瓦片。８の外面はナデ調整で、内面には布目痕が残る。９は内面がナデ、外面は11本を一単位とする櫛状工具による調整である。

遺物包含層出土土器（Ｆig. 22，10）

10は土師質の鼎脚部である。縦方向の篦削り後、指頭による成形を施す。

攪乱層出土土器（Ｆig. 22，11）

11は瓦質土器。鉢の口縁部で、体部はやや内彎気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。上端面には一条の沈線が巡る。内面は回転横ナデ、外面はナデによる調整。

出土遺物を時期的にみてみると、弥生土器は弥生時代前期～中期初め頃、須恵器は奈良時代初めのものと思われる。その他はすべて中世以降のもので、土師器が鎌倉時代、瓦質土器が室町時代頃と考えられる。また８の瓦は近世まで下る可能性もある。　（福　島）

Tab. 3　出土遺物観察表

①口径（復原値）　②底径（復原値）　③器高（現存高）　④最大厚

番号	器種	法量（cm）	色調	胎土	焼成	備考
ＳＫ１						
1	壷（弥生土器）	②(8.8)③(2.0)	内面―にぶい黄橙色(10YR)　外面―にぶい黄褐色(10YR)	やや粗い　0.1～0.3cm程度の砂粒を含む	やや軟	約１／２欠失
2	壷（弥生土器）	②(8.8)③(3.2)	内面―褐灰色(10 YR)　外面―橙色(7.5YR)	粗い　0.1～0.4cm程度の砂粒を多量含む	やや軟	約１／２欠失
3	甕（弥生土器）	②(8.8)③(6.2)	内面―淡黄色(2.5Y)　外面―灰白色(2.5Y)	やや粗い　0.1～0.2cm程度の砂粒を含む	やや軟	約３／４欠失
4	壷（弥生土器）	②(12.8)③(7.8)	内面―黄橙色(10 YR)　外面―淡黄橙色(10YR)	やや粗い　0.2～0.4cm程度の砂粒を含む	やや軟	約２／３欠失
ＳＤ４						
5	小皿（土師器）	①(8.9)②2.4③2.0	内面―浅黄橙色(10YR)　外面―浅黄橙色―部明褐色(7.5YR)	精良	良好	側面を約１／３欠失、糸切り底
6	小皿（輸入陶磁器）	①(9.6)②(2.0)	素地―灰白色(10Y)　釉―半透明な灰白色(10Y)	精良	良好	約３／４欠失
7	壷（須恵器）	②(9.0)③(3.2)	灰白色(7.5Y)	精良　微砂を若干含む	良好	約２／３欠失
8	瓦	④1.7	内面―青黒色(5BG)　外面―灰色(10Y)	精良	良好	外面―櫛状工具による調整
9	瓦	④1.6	内面―黒褐色(10YR)　外面―灰白色(5Y)―部明黄褐色(10YR)	精良　微砂を若干含む	良好	内面に布目痕
遺物包含層						
10	鼎（土師質）	③(3.6)	黄褐色(10 YR)	精良	良好	脚部のみ残存
攪乱層						
11	鉢（瓦質土器）	③(4.3)	内面―褐灰色(5YR)　外面―灰色(5Y)	やや粗い	良好	

（色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1976による）

6　小　結

今回の調査範囲内では、とくに北半部において近世以降のある時期に耕作地拡大のためと思われる地山を大きく削平した部分があり、そのため中世以前に遡る遺構、遺物の検出は周辺地域の既往調査地に比べて比較的少なかった。中世以前に遡る遺構は主にトレンチ内中央東部分から南西端にかけての地山面の削平度合が少ないその上面で検出された。ただし地表面から遺構面まで最も浅い所では10㎝たらずで、遺構上面には遺物包含層が覆わないことから察し、これらの検出遺構も後世多少なりとも上部が削平をうけている。検出した遺構の内、古代以前のものは小規模な土壙、柱穴などで、時期は主に弥生時代から古墳時代である。なお、その遺構の性格等は今回の調査範囲だけでは明確にし得ないが、この地はもり山から派生する舌状低丘陵部分の南向きの緩傾斜面上にあり、昭和46年度において当調査地点の南東に近接する第2学生食堂敷地内では古墳時代前半期の竪穴住居跡6棟[1]が検出され、また北東方向の地点でも昭和57年度において大学会館新営に伴う試掘調査の際竪穴住居跡1棟[2]を確認していることなどから勘案して、今回検出された遺構は当時の集落に関係する蓋然性が強いと察する。なお、検出遺構の中で、SK3は吉田遺跡の中では稀少な弥生時代前期に属するもので、これまで前期の遺構は現在の大学南門付近[3]においてのみ確認されていたことから、集落の形成過程やその拡がり、構成等を知る上で注目される。

（森　田）

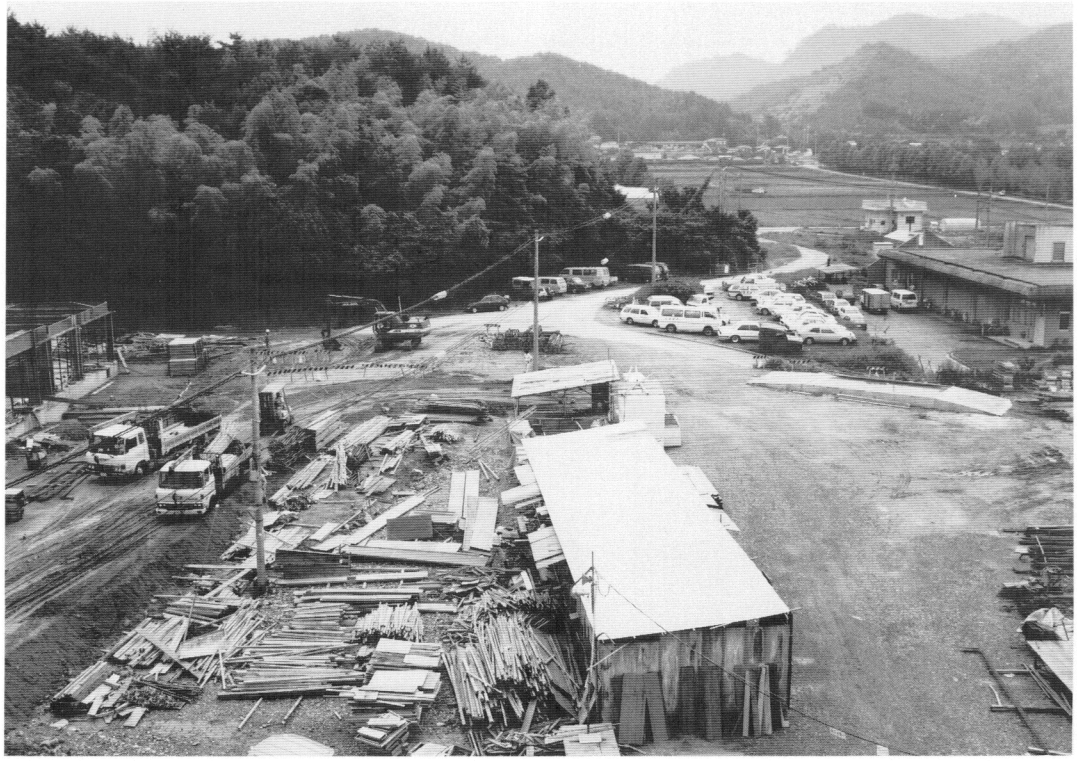
〔注〕

1) a　山口大学文化会考古学部『山口大学構内吉田遺跡第Ⅰ地区E区発掘調査概報』（孔版、1971年）。
　b　山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。

2)　山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

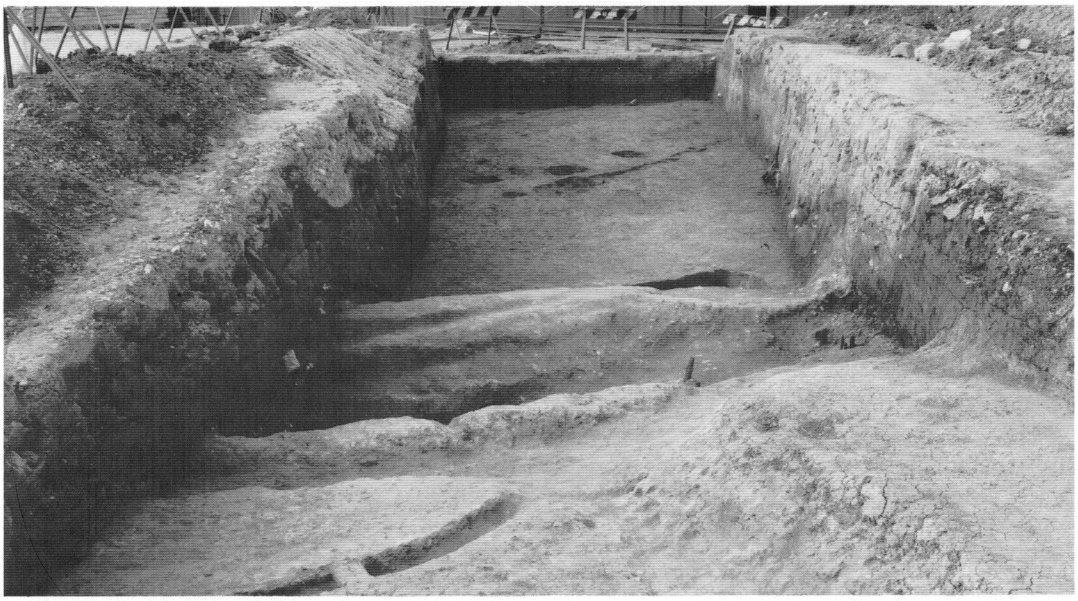
3)　注1）のbに同じ。

吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査(1)



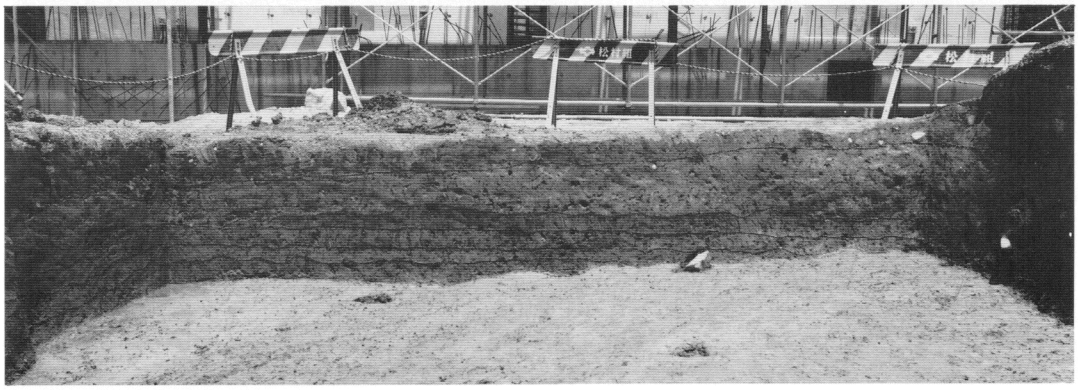
(1)　調査前全景（西から）

(2)　Aトレンチ全景（北から）

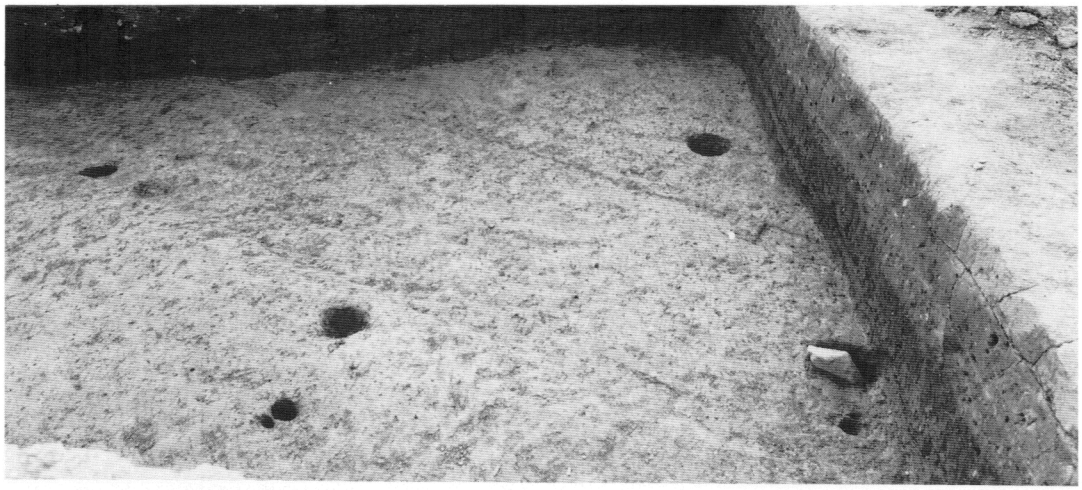


(1)　Aトレンチ北半部遺構分布状況（南から）

(2)　SD 4土層断面（西から）

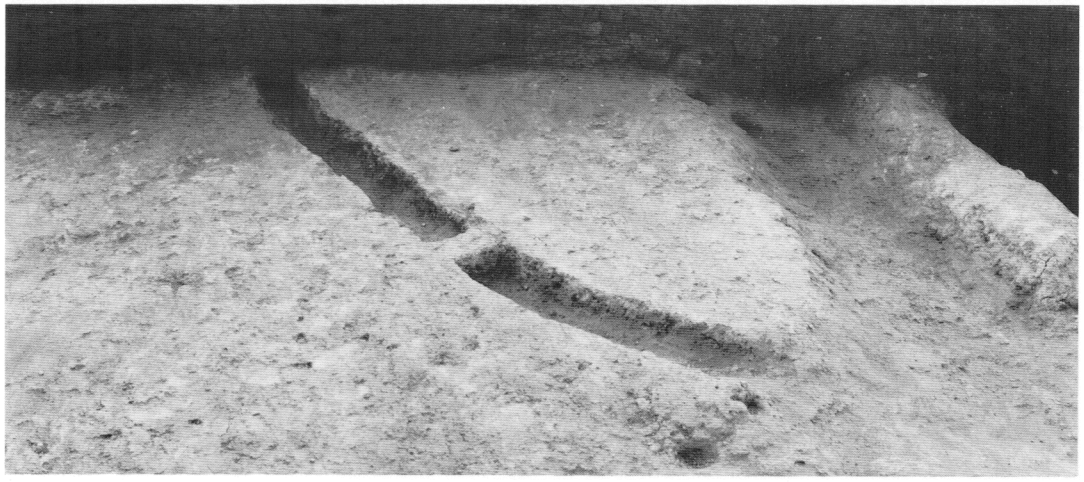


(3)　Aトレンチ北壁土層断面（南から）



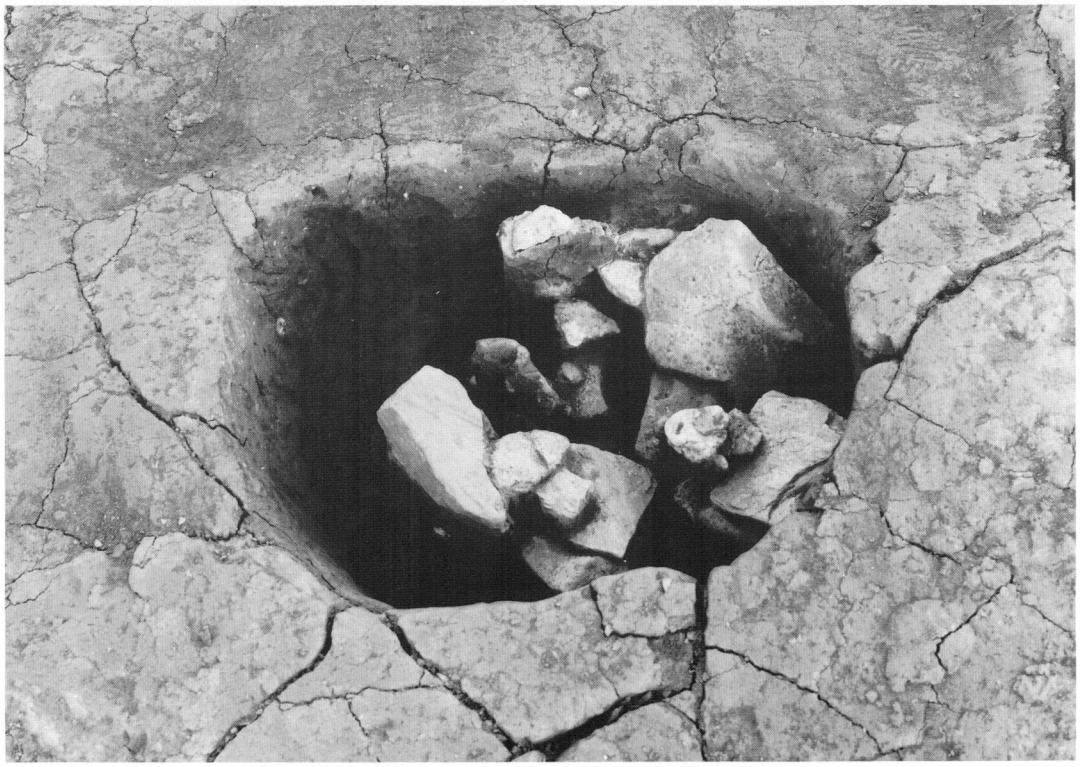
(1)　SD 1・2（東から）

(2)　SD 3（西から）



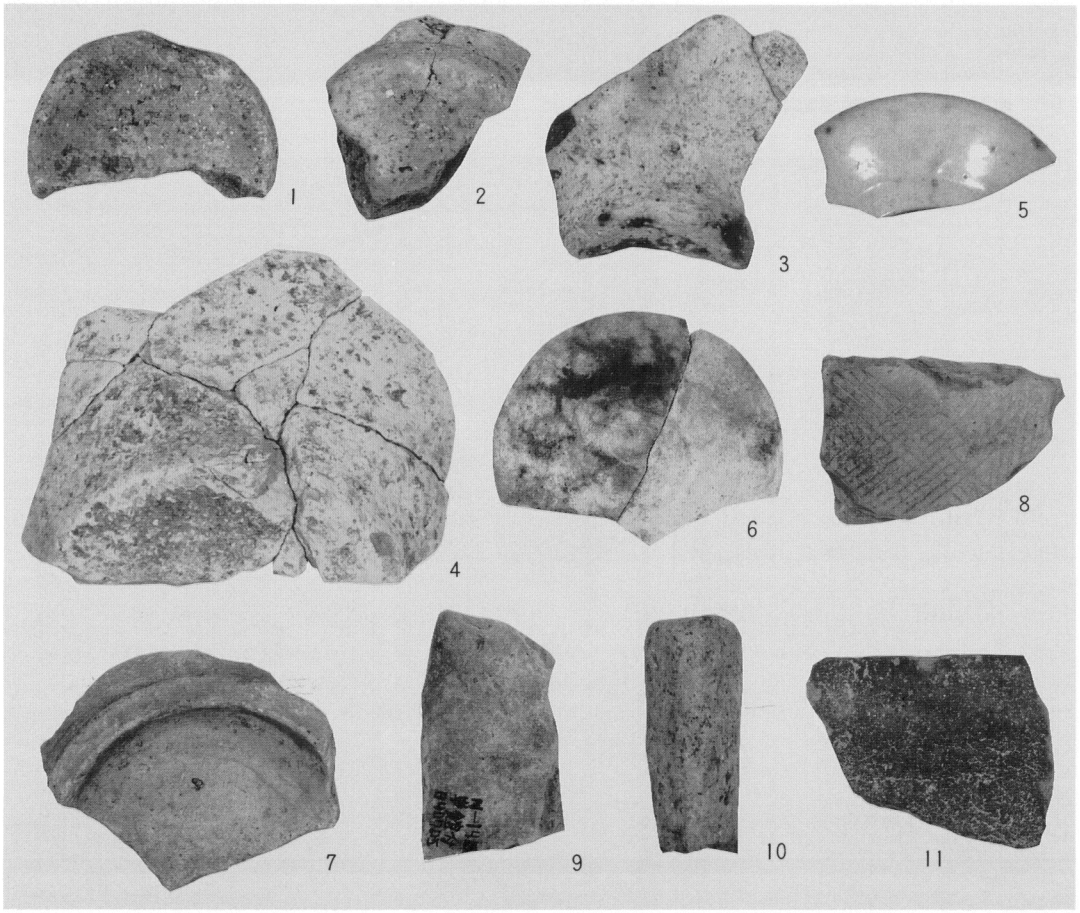
(3)　SD 6（西から）

(1)　Bトレンチ全景（北から）



(2)　SK3（北から）

(1) Bトレンチ南半部柱穴群（西から）



(2) 出土遺物